

同一患者における新規 rFSH 製剤ホリトロピンデルタと従来のホリトロピンアルファとの比較検討

藤田理恵<sup>1</sup>, 灘本圭子<sup>1</sup>, 小宮慎之介<sup>1</sup>, 森本義晴<sup>1</sup>

<sup>1</sup> HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

本研究では、新規遺伝子組換えヒト卵胞刺激ホルモン (FSH) 製剤であるホリトロピンデルタ ( $\delta$ ) と従来のホリトロピンアルファ ( $\alpha$ ) の生殖補助医療 (ART) における有効性を、同一患者において後方視的に検討した。

【方法】

2022 年 1 月から 2023 年 12 月に  $\delta$  と  $\alpha$  の両方を使用した 50 名の患者を対象とした。各群 25 名ずつ、 $\delta$  後に  $\alpha$ 、 $\alpha$  後に  $\delta$  実施し、AMH 値は 0.19-10.69 ng/mL であった。両群ともにアンタゴニスト法もしくは PPOS 法で調節卵胞刺激を行い、同一患者内では同一方法で比較した。

【結果】

採卵数 (以下結果は  $\delta$ 、 $\alpha$  の順) [7.0 vs. 9.5] ( $p=0.03$ )、成熟卵数 [5.1 vs. 7.1] ( $p=0.01$ )、正常受精卵数 [4.0 vs. 5.5] ( $p=0.03$ )、分割胚数 [3.9 vs. 5.36] ( $p=0.03$ ) と  $\alpha$  群が有意に多かったが、ET 可能胚数では有意差を認めなかった。総刺激量は  $\alpha$  群で有意に多かったが、刺激日数、採卵決定時 E2 値、OHSS 発生件数には差がなかった。

【考察】

$\delta$  群は  $\alpha$  群と比較して、採卵数は少ないが ET 可能胚数は同等であり、ART における  $\delta$  群の既存治療との同等性が示唆された。今後、より大規模な前向き研究による更なる検証が必要である。